

[第9回日本言語文化学会発表要旨]

日本語学習者の受身文の使用実態とその背景
— 中国語母語話者の日本語受身文 (中間報告) —

渡邊 亜子

(1994. 12. 10発表)

1. 研究の目的

中国語を母語とする中・上級日本語学習者の談話には、比較的多くの日本語受身文の使用がみられる。1991・92年の談話展開の実態調査では、中国語母語話者（以下学習者）の日本語受身文の使用数は26で、日本語母語話者（以下日本語話者）の30に近かった。しかし、日本語話者の用法と比較すると、正用・誤用のほか、日本語話者が受身文にしている箇所を能動文で表す傾向など、運用面でかなりことなる様相がみられた。

学習者の日本語受身文についての調査研究は、誤用分析の観点からのもの（顧・徐1980）、正用・誤用の両方に母語の影響が働いているととらえる母語の観点からのもの（馮 1993）、習得の観点からとらえた間接受身の「非用」の報告（田中・館岡・田部井 1994）があり、現在の研究は、正用・誤用・「非用」の使用実態と母語の受身表現が関係しているのととらえる流れになっている。本研究は、学習者の日本語受身文の実態とその背景を、これまでの構文的なとらえかたに加えて、談話レベルの資料を使って運用面からも考察することを目的とする。

2. データの収集方法

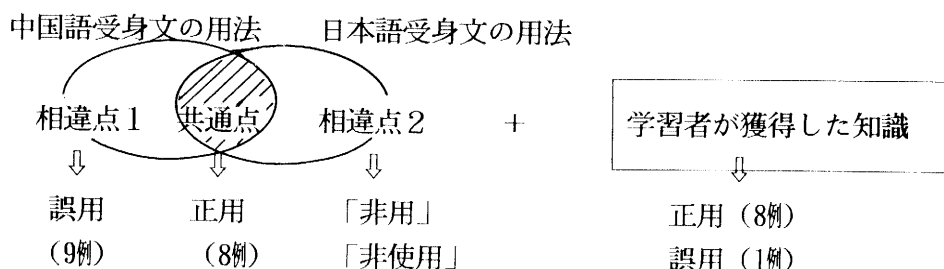
データⅠ：調査期間は1991年10月～1992年6月。データは、大学・大学院在学中の中・上級学習者と日本語話者それぞれ5名の発話資料で、4コマ漫画の内容説明の発話を個別面接法で録音収集したものである。データの種類は、日本語話者の日本語、学習者の日本語と母語の3種類で、これらから学習者の日本語受身文の使用実態と母語との関係の仮説を設定する。

データⅡ：中国語の小説と日本語訳本（老舍の『駱駝祥子』：1937、訳本は立間祥介訳：1980 岩波文庫、中山高志 訳 中山 時子監修：1991白帝社、）を使って、データⅠと質的に近い話し言葉の受身文を抽出したものである。データⅠで設定した仮説を、異なる言語資料であるデータⅡで確認する。

3. 考察

学習者の日本語受身文の使用実態とその背景を明らかにするために、学習者と日本語話者の日本語受身文の用法の比較、学習者の日本語受身文と母語の表現との対照をおこなった。なお、中国語の受身文は、受動マーカー“被”のある構文と、“被”のない自然被動文の二種類を考察の対象とした。

データⅠの考察の結果、学習者の日本語受身文には、正用、誤用、非使用の3つの実態がみられた。これらの使用実態を学習者の母語の表現と対照した結果、母語の影響があると考えられるものと、母語の影響ではなく学習者が個別に獲得した知識であると考えられるものの二つにわけられた。さらに、データⅡで日中受身文の構文および用法を比較して共通点・相違点を確認した結果、共通点と二つの相違点（Ⅰ・Ⅱ）があることがわかった。



日中受身文の構文・用法の共通点では正用がみられ、相違点Ⅰでは誤用が生まれている。学習者の正用の多くは、「直接受身文」の構文で、ある人物が被害を受けた場面で現れ、誤用の多くは「へんのかおがうつされて」のような無生物が行為者になるような場面で現れている。学習者の日本語受身文の使用実態と母語との関係については、「第2言語と母語の共通部分の学習には母語による促進的影響があり、相違部分の学習には干渉的影響がある」(馮1994: 31)という指摘は正しく、本研究でも同様の結果であった。非使用実態では、間接受身の「非用」のほかに、「～にいわれる」の「相手のうけみ」でも「非用」がみられた。また、日本語話者にはある一人の人物に注目していく過程で受身文が生成される傾向がみられるが、学習者の談話ではこのような運用はみられず、これらは学習済みの「非用」とはことなる運用未習による「非使用」(仮称)の実態ととらえてよいと考えられる。以上の母語との関係によると考えられる日本語受身文のほかに、母語では能動文で表現し、日本語では受身文を使うという実態もとらえられた。

4. まとめ

学習者の日本語受身文の使用数が多かったことと、使用実態の背景に母語の受身文がかなり関係していることを考え合わせると、学習者は日本語受身文の体系を母語の受身文の体系と近いととらえていると推測される。しかし、日中の受身文には構文的相違のほか、運用の面でも大きな違いがある。中・上級レベルの日本語教育では、日本語の人称受身文は話者の立場から出来事を語る「立場志向」（水谷 1985）と関連し、話しことばの談話レベルでは「視点的」原理と関連していることを、学習者に意識させることが効果的ではないかと考える。また、母語を背景としていない日本語受身文もかなりあり、これらは中・上級レベル学習者が日本語学習途上で個別に獲得した知識ととらえられ、受身文の習得状況の一つとして興味深いものである。

今後、日中受身文の共通点・相違点を運用の観点からさらにきめ細かくとらえていきたいと考えている。

主な参考文献

- 顧海根・徐昌華 1980 「中国人学習者によくみられる誤用例—疑問詞用法と受身文を中心に—」 『日本語教育』 41 日本語教育学会
- 大河内康憲 1983 「日・中の被動表現」 『日本語学』 4 明治書院
- 水谷信子 1985 『日英比較 話しことばの文法』 くろしお出版
- 劉 素英 1991 「受動表現における日中言語の比較」 『ことば』 12 現代日本語研究会
- 渡邊亜子 1992 「日本語学習者の談話における視点—ストーリーテリングによる調査の分析—」 『日本語教育学会 予稿集』
- 渡邊亜子 1993 「中・上級日本語学習者の談話展開—「視点」と接続表現からの考察—」 日本語シンポジウム『言語理論と日本語教育の相互活性化』予稿集 津田日本語教育センター
- 水谷信子 1993 「「非用」と談話の展開」 『日本語学』 12 明治書院
- 馮 富榮 1993 「日本語受動文の学習過程における母語—中国語の影響について」 Japanese Journal of Educational Psychology 41 日本教育心理学会
- 田中真理・館岡洋子・田部井圭子 1994 「中・上級日本語学習者の“ねじれ文”について」 『日本語教育学会春季大会 予稿集』 日本語教育学会（お茶の水女子大学人間文化研究科比較文化学専攻2年）